

月刊

# いじろのとも

第十五卷

六月号

## ホームレスいじめ

ホームレスいじめと  
称して

二人の少年が

六十四歳の男性を

溺れ死にさせた

人間を

犬猫ほどにしか

思わない

若者たち

日本の行く末は  
限りなく危うい

## スキンシップより笑顔

子育てで

スキンシップは

あたりまえ

笑顔を送れ

言葉を送れ

# 人生を考え直して

## みたい人は(一一二五)

空海『即身成仏義』解説(二六)

(九) 心数心王刹塵に過ぎたり、各各五智無際智を具す

(九) - 1 一切智智

次の両句は、即ちこの義を表す。もし決断の徳を明かすには、則ち智を以て名を得。集起(じつき)を顯わすには、則ち心を以て称(な)とす。軌持(きじ)を顯わすには、則ち法門に称を得。一一の名号、皆人を離れず。是の如くの人・数、刹塵に過ぎたり。故に一切智智と名づく。顯家(けんけ)の一智を以て一切に対して、この号(な)を得るには同ぜず。

(九) - 2 心王・心数

心王とは法界体性智等なり。心数とは多一識なり。「各(おのおの)五智を具す」とは、一一の心王・心数に各各に之有ることを明かす。無際智とは高広無数の義なり。

現代語訳として『弘法大師空海全集第二巻』(筑摩書房刊)の中の松本照敬訳を引用させて頂きます。

\* \* \* \*

成仏の詩におせる第二と第三の両句は、この意味 - - すべてが一切智智をそなえもっていること - - をあらわしている。

万物にみちみちている一切智智について、もしも決断の徳を明らかにするときには、「智」(ジユニヤーナ)という名でよぶ。諸現象の生起する原因の集まり、という意味をあらわすときには、「心」(チッタ)という名でよぶ。真理が軌範となつて人の心に理解を生じさせる意味をあらわすときは「法門」(ダルマ)という名でよぶ。

「智」と「心」と「法」という名は、いずれも「人」を離れてあるものではない。このような「人」は、数があるはなはだ多く、国土を砕いて塵にした数量より以上にもおよぶのである。だから、すべての人びとがそなえている智慧、という意味で、「一切智智」と名づけるのである。

一般仏教の人びとは、一つの智慧によってすべての事象を知る、という意味で、「一切智智」という語を用いるが、わが密教における意味は、それと同じでない。

詩のなかの 心王 というのは、真理の世界を明らかにする智慧なぞの五つの智慧を意味する。

心数 とは、万物が本来は平等であることを知った上で、現象界の区別相を識別する智慧のことである。

それぞれに、五つの智慧がそなわり というのは、一々の 心王 や 心数 のそれぞれに、五つの智慧があることを明らかにする。

際限もない智慧 というのは、宇宙のあらゆるところに充滿している仏の智慧をさし示す意味である。

\* \* \* \* \*

難しいと思えるところを少しだけ解説させて頂きま  
す。 まず、「智」と「心」と「法」について検討して  
みたいと思います。「智」は決断の徳を明らかにすると  
きにそう呼ぶ、とありますが、「決断の徳」とは、正邪  
善悪の判断決定を間違いないことができる、という  
ことを意味しています。実は、これはとても難しいこと  
です。大多数（ほぼ全員）の人は、日常的に間違った判  
断をして、行動しています。でも、その自覚がありません。  
それは、理屈でそうできるわけではないからです。  
髄識（無意識）の精髓（生命意識）と神髄（如来意識）  
が統合されたときのみ、そうできるのです。

実は、それがその次に出ています「心」なのです。そ

れは、「諸現象の生起する原因の集まり、という意味を  
あらわすとき」、そう呼ぶとありますが、抽象的で、な  
かなかご理解いただけなのではないでしょうか。

「諸現象の生起する原因の集まり」とは、実は、人間  
の心（精神）の中にあるのです。分かりにくいかも知れ  
ませんが、諸現象を諸現象たらしめているのは、人間自  
身の心なのです。人間の認識作用が諸現象の原因につ  
いて特定しているのです。その根本が髄識を統一したとき  
得られるものです。それを、「原因の集まり」と言っ  
ているのです。それが、心であるというわけです。

次に「法」ですが、それは、「真理が軌範となって人  
の心に理解を生じさせる意味をあらわすとき」、そう呼  
ぶということですが。

真理とは何かですが、ここでは単なる普通の意味を超  
えています。絶対なる「宇宙根源の原理」と言ってもよ  
いものです。この世の存在は、この原理に則って現象し  
ているわけです。ですから、「真理が軌範」となって、  
「人の心に理解が生じる」ということになるのです。

ここで、この「智と心と法」と私の理論との対応につ  
いて、触れておきたいと思います。大まかに言いますと、  
智は自己の働き、心は髄識での自他の統合、法は他己の  
働きに属するということです。

次に、現代語訳に「心王」というのは、真理の世界を明らかにする智慧などの五つの智慧を意味する」とありますが、私は、これは五つではなくて、「法界体性智」一つだけのことだと思ふのです。空海の書かれた漢文では「心王者法界体性智等」となっていますが、この「等」は「などなど」という意味ではなくて、「等しい」という意味ではないかと思ふのです。つまり、心王は法界体性智に等しいという意味だということです。

そうしますと、次の「心数」とは、万物が本来は平等であることを知った上で、現象界の区別相を識別する智慧のことである」とは、大日如来の法界体性智が現象界の区別相を識別する四仏の智慧ということになるのだと思ふのです。

四仏の智慧につきましては、第十三巻十月号で紹介しました。ご参照いただければ幸いです。そこでは、私の理論との対応が検討されています。

前述の現代語訳にあります「万物が本来は平等であることを知った上で」という条件は、実は、「大日如来の自内証が得られたのち」ということなのです。その自内証とは、「万物と一体となり、万物が平等であるという体験」ですから、その上で、意識世界の真実な識別作用が得られるということなのです。

## 自作詩短歌等選

### 生きる喜び

生かされて  
生きる喜び  
湧きいずる  
日々の暮らしの  
樂しかりけり

### 自己主張を控える

自己主張  
第一原理と  
する限り  
世界に争い  
止むことの無し

### 若者の自殺

就職難で  
自殺する学生が  
増えているという  
自己肥大し  
ストレスに弱い  
若者たち

過去（他己）もなければ  
未来（自己）もない  
ただあるのは  
刹那だけ  
だから  
何かストレスかかれば  
衝動的に  
自殺したり  
犯罪を犯したりするのだ

## 自由教育の伝統

小学1年生が  
学校に適應できない  
それを  
小1プロブレム  
という  
教室で騒いで  
授業が  
できないらしい  
自由教育  
自分の好きなことをし  
嫌いなことをするな  
我慢はいらぬ  
のびのび育っていけ  
そうするときだけ  
善い人間になれるのだ  
ルソーとペスタロッチの  
伝統は未だに続く

## 日本文化の喪失は

伝統的な  
日本文化の喪失は  
他己の喪失による

民主主義は  
自己肥大・他己萎縮を  
招来し  
過去を喪失させて  
刹那に墮するから

## 民主主義的過誤

民主主義的  
多数決原理

間違い隠す  
手段となりぬ

## 無宗教日本教

無宗教  
誇る日本に  
未来なし  
生きる目標  
刹那に消えて

## 増える精神疾患

教員が  
精神病んで  
休職す  
年々増えるを  
何とすべしや

## 虐待事件頻発

虐待の  
事件見るたび  
日本の  
こころの荒れの  
深さ悲しむ

## 権利主張とモラル崩壊

日本じゅう  
権利権利と  
叫ぶほど  
人のこころは  
荒れてゆき  
モラル崩壊  
ますます進む

## ブッシュ大統領の信念

ブッシュ米大統領の  
イラク戦争開戦の信念は

イラクに自由を  
もたらし  
中東に民主主義を広げ  
米国をテロから守る

であったという

でも  
この信念とは  
うらはらに  
テロの脅威は  
ますます  
高まっている

## 子どもの居場所づくり

文部省が  
子どもの居場所づくり  
をスタートさせた

ボランティアの  
大人たちと  
一緒に遊びながら  
健全な子育てを支援  
しようという試み

我が子さえ  
ろくに育てられない  
大人が多いのに  
どうしてこんなことが  
できるのか

まず  
大人の啓蒙・啓発がいる

## 自作随筆選

### 少女による殺人事件

また、また、子どもによる凶悪・残忍な殺人事件が起  
こりました。

今度は、長崎県佐世保市の小学六年生の少女（二歳）  
が同級生の少女を学校内の教室で、カッターナイフで切  
り殺すという事件です。

長崎県では、昨年七月に、長崎市で中学一年生の男子  
（二歳）が幼稚園児（4歳）を立体駐車場の屋上から  
突き落として殺害するという痛ましい事件が起きたばか  
りでした。

なぜ、こうした若年者による凶悪な殺傷事件が度々起  
こるのでしょうか。

テレビや新聞などのマスメディアでは、さまざま人た  
ちが、さまざまにコメントしています。

例えば、この二人は、結構仲良しで、インターネット  
でやり取りしていたのですが、それが問題だとするもの、  
これらの思春期前期にある少年少女は、情緒的に不安定  
になりやすいからだとするもの、残忍な映画や小説が悪

影響を及ぼしているとするもの、学校そのものが閉鎖的（少子化で1学年1クラスのみ）になっているから、といったもの等々、さまざまです。

でも、私から見ますと、的確に原因を指摘していると思えるものは、一つもありません。

それらは、いずれも、情緒的に混乱して憎悪感情を強く持つに至った経緯や原因については、触れていますが、それが、なぜ、殺人という、人間にとって最も凶悪な犯罪に結びついていくのか、については殆ど触れていないのです。

多くの人は、長い人生の中で、一度や二度は、殺してやりたいと思うこともあるかも知れませんが、でも、それを実行に移す人は、滅多に、いないのではないかと思うのです。

怒りが、こころの中に沸き起こって、その原因となつた人に危害を及ぼしたいと思うことと、その思いを実際の行為として遂行することとの間には、大きなギャップがあるのです。つまり、人間として、してはならないことをする時には、こころに強いブレーキがかかるのです。

それが、いまの若者、否、日本人一般に、多かれ少なかれ、なくなって来ているのです。

では、思うことと為すこととのギャップとは、何なの

でしょうか。あるいは、こころのブレーキとは何なのでしょうか。

それは、私の理論では、「他己」なのです。

一般的な言葉で言いますと、他者性であり、規範意識と言えるものです。そして、その基盤は、「人の心を感じるこころ」にあるのです。

自分の怒りがどれほど強くても、もし、その怒りを他者にぶつけて殺したりしますと、その殺される人自身が、強い恐怖を感じることは勿論、その人を取り巻く多くの人がどれほど悲しむことだろうか。また、自分自身の親や子や兄弟がそのことによってどれほど迷惑をうけるだろうか。そのことを考えますと、到底、実行に移すことは出来ないのです。それは、私たち人間が、「人の心を感じるこころ」をもっている、ということなのです。

ところが、戦後の民主主義教育は、公教育における宗教教育を否定し（未だに、国歌を歌ったり、国旗に敬礼したりすることを否定する人がいます）、子どもたちに「自分の意見」を持つたり「自己を主張」したりすることばかりを教えて来ましたから、日本では「人の心を感じるこころ」が、だんだんと弱くなって来たのです。もっと言いますと、規範性が失われて来たのです。今、はやりの言葉で言いますと、子どもたちだけではなく、日

本人全体に「モラルハザード」が起こるようになって来たのです。

このように、「してはならないこと」と「それをしてしまうこと」との間に存在したギャップが、だんだんとなくなって来たのです。飛び越えてはならない溝が埋まってしまつて、誰もが、飛び越えるという意識すらなく、素通りしてしまうのです。

それが、いま日本中で問題になっていきます、企業家倫理の喪失ですし、年金問題を例に出すまでもないと思いますが、政治家の「虚言癖」だったりするわけです。

ですから、こうした日本人の根本的な精神構造を正していくような提案や対策でないかぎり、子どもたちの、次から次へと起こる、想像を絶するような凶悪な犯罪を抑止することは、到底、不可能なのです。

子どもたちに、インターネットの使用を制限してみたり、映画や小説を規制してみても、しないよりはしたほうがましだとは思いますが、それほど効果があがるとは思えません。

文部省は、神戸での酒鬼薔薇聖徒事件以来、こころの教育を重視し、『こころのノート』を小・中学校の全生徒に配付して、それを実践してきました。

例えば、問題となっています小学生高学年用（5、6

年用）には、次のような記述があります。

「ともに生きる」という「章」の中に「友だちつていよね」という「節」があります。そこには、次のような文章が載せてあります。

友だちは／自分がないものをもっている。／わたしたちは友だちから／いろいろなることを学ぶことができる。だからこそ／友だちは一生のたからもの。

そんな大切な友だちだけど／考えていること感じていることはそれぞれがう。／受け入れることができないと関係がうまくいなくなつたりしてしまう。／心がちよつとせまくなると／たがいに気まづくなつてしまつたり。

でも、そのときは／自分をきたえる絶好のチャンス。にげずに、向き合うこと。／そして相手の立場に立つて考えてみることに。／そのことで、逆にたがいの理解が深まる。

また、「生命を愛（いと）おしむ」という「章」の中に、「いま生きているわたしを感じよう」という「節」があり、その中に次のような文章があります。

「かぎりあるいのち／かけがえのないいのち／受けつがれるいのち／わたしが生かしていくいのち／わたしのいのち／だから・・・」

長崎では、中学生が幼児を駐車場の屋上から突き落として死亡させた事件以来、生命を大切にする「こころの教育」が重要視されて、どの小・中学校でも上述しました『こころのノート』を使っていたことだと思つたのです。でも、その長崎県で同じように年少者による残忍な殺人事件が起こってしまいました。

六月三日の毎日新聞の社説では、「繰り返し指導していたのに、今回の事件を防げなかったのは指導に工夫が足らなかったからではないか」と述べています。

果して指導法を工夫したぐらいで、「こころ」の教育ができるものなのでしょうか。

私は、この『こころのノート』が出た時、すぐ小・中学生用すべてを入手してコピーし、読んでみました。そして、あきれました。なぜなら、こんなことで、「こころ」の教育ができるなどは、まったく考えられなかったからです。

それは、実は、予測できたことでもあったのです。と言いますのは、論文にもしましたが、こころの教育を審議する小委員会の答申が、既に、不十分極まるものだったからです。（中塚善次郎・小川敦（2000）こころの教育論 鳴門教育大学研究紀要 第15巻。インターネットで公開しています。抜き刷りかコピーを入手ご希望の方はお申し付け下さい。）

望の方はお申し付け下さい。）

なぜ不十分なのか、もっとも中心的な問題（理由）は、「こころ」とは何かが、分かっていないことにあります。

引用しましたようなことをいくら児童・生徒に読ませ考えさせても、「こころ」の教育にはならないのです。この『こころのノート』は、「あたま」の教育にはなっても、「こころ」の教育にはなっていないのです。

人間は、「あたま」で幾ら知識を増やさせたり、考えさせたりしても、「こころ」をコントロールできるようにはならないのです。

私の理論では、こころは情動・感情の働きです。情動とは、自分のこころ（情）の動きのことです。自分の欲求（性欲、食欲、優越欲など）、情緒（快苦喜怒哀楽など）、気分などから成ります。また感情は、他者のこころ（情）を感じる働きのことです。

現代人は、民主主義のために、他己の働きが極めて弱くなっています。感情は他己の構成要素の一つですので、この感情の働きも極めて弱いのです。つまり、人の心を感じるものが、極めてできにくくなっているのです。あるいは、感じるものができたとしても、自分の欲望や感情や気分によって、それが、意味を持たなくなってしまうのです。

具体的に言いますと、自分の欠点を指摘されたり、中傷されたりしますと、怒りが沸き起こり、「人の心を感じるころ」はどこかに吹き飛んで、指摘したり中傷したりした人を攻撃したくなるのです。その極限が「不殺生戒」を犯すことになって行くのです。

こころの教育は、この「人の心を感じるころ」を育てることなのです。それによって自分のこころをコントロールする力を養うのです。

そうしないと、たとえ「こうすべきだ」と知っていても、実行はできないのです。たとえば、引用しました上述の「相手の立場に立って考えてみる」と知っていても、自分の情動に執らわれたとき、そんな知識は、どこかに吹き飛んで、全く役に立たないのです。

では、「人の心を感じるころ」、つまり、感情を育てるにはどうすればよいのでしょうか。

そのためには、基本的には他者との「愛情」あるコミュニケーション、私の言葉で言いますと「情動の共有」を経験することが必要なのです。少し飛躍しますが、愛情は、無意識に属することで、意識してできることではないのです。信仰に属することです。それは、自分を越えた「力」が自分に働いていることを信じていることです。それによって、他者の感情を育てることができるのです。

## 釈尊のごとば（一三四）

法句経解説

（三九六）われは、（バラモン女の）胎から生まれ（バラモンの）母から生まれた人をバラモンと呼ぶのではない。かれは「きみよ」といつて呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにとらわれている。無一物であつて執着のない人、- - かれをわたしは バラモン と呼ぶ。

真のバラモンは、カースト制のバラモンという階級に属する女性から生まれた人だから、バラモンなのではない、ということですが、

そうした人は、「きみよ」といつて呼びかける者」だということですが、中村元訳の訳注によりますと、次のように書かれています。

「原始仏典を見ると、バラモンはゴータマ・ブッダに向かつて『きみよ！』と言つて呼びかけている。ゴータマ・ブッダに対して特別の尊敬を払っていないのである。」とあります。

なぜ、バラモンが釈尊に尊敬を払わないのかですが、それは、バラモンの心のなかに執らわれがあつたからで

す。もし、執らわれなければ、釈尊の偉大さが分かるはずなのです。そうすれば、当然、尊敬の念が湧いてくると思うのです。

分らないというのは、「私は、カースト制のバラモンという最上位の階層に属し、偉い」という執らわれ、あるいはその結果であることが多いと思いますが、「私は、財産や名誉や権力をもっている」という執らわれ、があるからなのです。

偈にもありますように、それが「何か所有物の思いにとらわれている」ということなのです。

釈尊は、「無一物であつて執着のない人」をバラモンと呼ぶと言われています。

でも、現代人には、この「執着」を捨てることが、よいことだということがなかなか理解できませんし、勿論、それは、とても難しいことでもあるのですが。

私が、大学での授業で、学生たちに「真の幸せになるには、あらゆることへの執着を捨てなければならぬ」と言いますと、感想文の中で、「執着を捨てたら生きていけない。命への執着があるからこそ、生きていけるのだ」と書いてきます。

あらゆることに執着することを「よし」とする、民主主義教育の「お陰」なのか、なかなか、理解するのが難

しいようです。

執着がなくなりますと、生きていけないどころか、かえって、生きることが楽しくなって、毎日まいにちが充実してくるのです。そして、ますます活き活きと生きていけるのです。もちろん、適宜の休息は必要ですが、怠けたいという気持ちは、まったく起こりませんし、自分が生きるというよりは、無意識のうちに誰かのために生きて行くことになっています。

でも、前述しましたように、現代では民主主義教育のせいで、自己を追求することをもって人生の最善の目的にしていますので、他者のために生きるというようなことは、まったく理解できなくなっています。政治家を例に挙げればよくお分かり頂けると思いますが、彼らの中に二世、三世がどれほどいることが。昔なら、政治は、世のため人のためにするもので、政治をすれば、「井戸堀」となる、つまり、財産をすべて売り尽くして、売れない井戸と堀のみが残るとされました。でも、今は、どの政治家も豪邸を建てて、財産を誇っています。それを、守ることにきゅうきゅうとしているのです。自己への執着の極致です。これは、政治家に限りません。官吏ばかり、企業家ばかり、です。こうして、日本中が、ここを荒らし、不幸になっていつているのです。

後記

一、うつつらしい梅雨も、雨にぬれたあじさいの花を見ますと、梅雨もいいなあと思ったりします。  
 二、五月下旬に、一反だけ田植えをしました。教えてもらいながら、田植え機で植えました。一時間ほどでしたでしょうか、早いのに驚かされました。植えた品種は、コシヒカリです。

三、今回の田植えで印象に残ったことですが、耕運機での「しろかき」が大変だった、ということ。耕運機について歩くだけならよいのですが、土地が悪いのか、しょっちゅうぬめりこんで、引き上げながらでない、前に進まないのです。ヤンマーのかなり重い大型機種のせいもあるかもしれませんが。大多数の人が、耕運機ではなく、乗ってできるトラクターがよく分かりました。以後、続けるには、やはりトラクターが要るという思いがしています。でも、そうすれば、ますます道楽農業、趣味農業、土地保有仕方なし農業になってしまふと思います。私は、採算を度外視することは、同じですが、生き方として自給自足を目指す農業、「生き方農業」と思っているのですが。  
 四、畑には、ナス、キュウリ、いんげん豆、ニラ、里芋、カボチャ、さつまいも、オクラなどを植えています。

五、本職の研究の方ですが、引越しがまだ、片づいていないこともあり、ほとんど手づかずです。教育の出発点である幼児教育が間違っているという思いが強いものですので、いま、「自由」教育を生み出してきた歴史的流れを明らかにしたいと思い、内弟子の人に文献を検討してもらっています。いずれ、論文にしてみらうつもりです。

六、先日、いま住んでいます地区の共有林の下草刈りにでました。その後、地区の総会と昼食会がありました。三十人ほど出席されましたが、みんな和気あいあい、歓談ができました。ありがたいことです。

月刊 こころのとも 第十五巻 六月号 (通巻 一七四号)	平成十六年六月八日 〒708 8511 岡山県津山市北園町50番地 美作大学 児童学科気付
	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 016108 38660	